

経営戦略を聞く

サンコー

サンコーは、金属精密機加工技術をベースに、自動車の材料・部品をはじめプリンターやハードディスクの部品などで世界的シェアを誇る。一方、コア技術を活用することで、自動車電動化分野向けの製品開発や医療・環境分野への展開など、事業規模の拡大に取り組んでいる。大谷忠雄社長に、現状や今後の展開などについて聞いた。

「自動車分野、電子情報通信分野とも好調に推移している。」「昨年の下期以降、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から需要は大きく回復し、足元もその傾向は続いている。自動車では国内および中国向けの弁は消耗材や精密異形材などの材料関連に加え、電動車用バスバーやシフトバイワイヤが大きく伸び、電子情報通信では、データセンタール



大谷 忠雄社長

伊藤忠丸紅 鉄鋼と関係強化 中国で協業展開

伸び、2021年4-6月期連結業績は売上高が47・2%増の79億6400万円とコロナ禍前の水準に回復、利益面も黒字回復した。――22年3月期は過去

最高の売上高達成を予想している。「半導体供給やコロナ禍の動向など不確定要素はあるものの、自動車生産の回復継続で弁はね用鋼線は需要好調、重点戦略製品と位置付けるバスバーやモーターコアなどの拡販が期待できるほか、電子情報通信分野も好調継続見通しのため、業績予想を上方修正し、顧客の事業動向に沿う形

る。コロナ禍で海外での需要が増加している。当社も4年前から、電動ファンや自動搬送装置、太陽光発電など各種用途向けに順次量産対応してきたが、今年11月からはバスバー(大容量の電流を流す導体)一体型シャントを、米自動車メーカーのEV乗用車へ量産供給を開始する。23年には

連結売上高は過去最高の47・6億円を見込んでいる。――最終年度を迎えた中期経営計画の進捗はどうか。「現中計『GG P21』の目標数値として連結売上高が500億円超、営業利益率6・5%達成を掲げている。」「自動車電動化の流れに伴い、電流の監視や異常検出、コントロールを行うシャントセンサーの

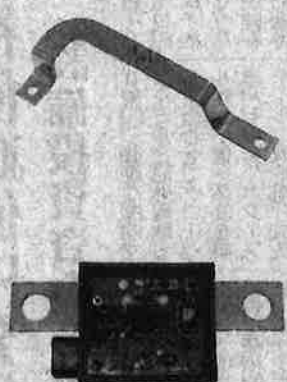
で着実に進めており、3カ年で当初160億円だった投資計画は、前倒して計190億円規模で実行中だ。――今年3月には、伊藤忠丸紅鉄鋼が伊藤忠商事の一部保有株を引き受ける形で、12%(約18億円)の出資を受けた。」「伊藤忠グループである同社との関係強化は大きなチャンスだと捉えている。拡大する電動自動

拡大する電動車市場に照準

「研究開発の進捗もよく状況は。」「戦略開発のスピードを一層加速するため、8月1日付で新たに開発本部を設置した。これ

「自動車電動化向けのバスバーは、需要増加や仕様の多様化が加速している。従来から量産されていた短尺サイズ品は中国メーカーの参入で価格競争が激化していた。当社開発品は取り扱いが難しいとされるフォームینگ加工の中長尺(展開長

車市場を主要ターゲットに、当社の金属精密機加工、精密加工技術の活用を営業活動に加えていた。」「伊藤忠丸紅鉄鋼の原材料調達や顧客開拓、物流などといったグローバルネットワークの活用や、グループ関連企業とのビジネスシナジーなどが期待される。まずはEV化が進む中国での協業・販売を展開していく。――新規事業・製品の展開状況は。」「自動車電動化向けのバスバーは、需要増加や仕様の多様化が加速している。従来から量産されていた短尺サイズ品は中国メーカーの参入で価格競争が激化していた。当社開発品は取り扱いが難しいとされるフォームینگ加工の中長尺(展開長



シャントバスバー

シャントセンサー